5 地域社会論演習:「『雲を紡ぐ』でつながろうプロジェクト」との連携～井戸水とホームスパンのおもてなし～

三須田善暢（岩手県立大学盛岡短期大学部　准教授）、
及川明音、菅沼秀、高岡摂、村松冴恵（2021 年度国際文化学科学生）

該当する原則

原則 9 ： 持続可能性を推進する

1．活動の概要

「地域社会論演習」（岩手県立大学盛岡短期大学部国際文化学科２年次授業）は、地域で企画をたてて実施し、それを自分たちの学びに役立てる（サービスラーニング）ことを趣旨とする。その趣旨にもとに、現在盛岡市と盛岡まち並み塾がおこなっている「『雲を紡ぐ』でつながろうプロジェクト」と連携し、学生が地域の資源を使ってできることについて企画し、町の人達と交流することを通じて町の魅力と課題を考える機会にした。

2021年度は井戸水で著名な盛岡市鉈屋町を舞台として、井戸掃除のお手伝いと、井戸水でのお菓子作りとお茶会、およびホームスパン的なものによる手芸品の作成を企画した。お茶会を通じて町の方から井戸水利用と暮らしにちなむお話をうかがった。

お菓子を食べながらお話をうかがう

2．企画立案まで

本演習では、まず座学でサービスラーニングの基礎とブレインストーミング（集団的発想法）について学び、盛岡まち並み塾の岩見麻梨子さんから話を聞いた後、鉈屋町の町歩きをした。また、鉈屋町が舞台である小説『雲と紡ぐ』のテーマの一つがホームスパン（家庭で紡いだ糸で織った織物）であることから、工房の「みちのくあかね会」を見学した。

その後、これらの知見をもとに、鉈屋町の街づくりに関してどのような企画が立てられるか学生たちで案を出した。検討の結果、「大慈清水の井戸掃除をして、井戸水でお菓子作り＋御休み処でホームスパンを用いた作品をつくる」という案を決定した。企画名は「井戸水とホームスパンのおもてなし」として実施日を2021年12月17日と定め、それまでの必要な作業をリストアップし、井戸掃除班、お菓子作り班、手づくり班、広報班等の作業班を立ち上げた。

ホームスパン関係の手芸品作成に挑む

3．企画の準備

準備として各班で次の作業を実施した。

⑴ **井戸掃除班：**当日の作業内容の確認

⑵ **お菓子作り班:**井戸水を使ったホットケーキと水信玄餅を作り、町の方々に振る舞うお茶会の段取り

⑶ **手作り班：**『雲を紡ぐ』に関連した羊毛フェルトを用いた羊のマスコット制作のため素材をリストアップ

⑷ **広報班：**マスメディア数社への事前周知を実施

4．企画当日の記録

⑴ 井戸掃除班は、現地到着後、鉈屋町の井戸管理に携わる佐藤好春さんへ挨拶に伺った。そこで、大慈清水のポンプの調子が悪いため、今回は残念ながら井戸掃除ができないことが判明したため、予定を変更し、佐藤さんの案内のもと、大慈清水の歴史や特徴、鉈屋町の井戸水の成り立ちを聞く町歩きを実施した。

⑵ お菓子作り班は、事前に汲み上げておいた井戸水を利用してお菓子作りに取りかかり、水信玄餅を20個程製作した。多量の水信玄餅を作るのは初めてだったが、出来栄えもよく成功したと自負している。その他にホットケーキも数枚製作した。

⑶ お菓子作りに時間がかかったため、マスコット製作は作業を当日は中止し、後日、大学で完成させた

⑷ マスメディアの取材はなかったが、鉈屋町町内会会報担当の脇田桂一郎さんが取材をしてくださった。

⑸ お菓子と抹茶のお茶会をし、地元の方など５名と井戸利用に関わる地域生活などのお話をした。鉈屋町の住民、兼平史子さんから、昭和中期は、町民同士で生活を共有する場として井戸を使っていたというお話を伺った。現在でも井戸水は町内外の人に利用されており、生活を支えている面があることは発見であった。

5．企画後の振り返り

企画実施後は振り返りのために各自報告書を執筆した。町の活動に関わる人の性格や地域の交通問題など多々掘り下げてみたい点があげられた。その一部は学生たちの卒業研究に発展している。